むかしむかし、ある村にびんぼうだが、酒の大好きな百姓がおった。ところが、この百姓はなまけ者で、その上ぬすみぐせがあった。

ある日のこと、酒を買うにもお金がなく、とうとうがまんできず、盗人をしようと思った。

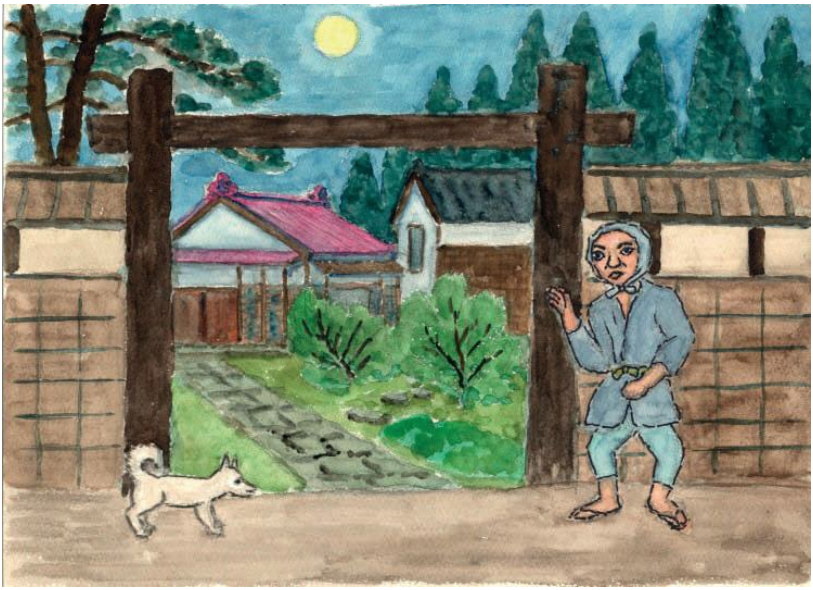
しかし、近隣では顔見知りが多く、遠くはなれた寺井を選んだ。

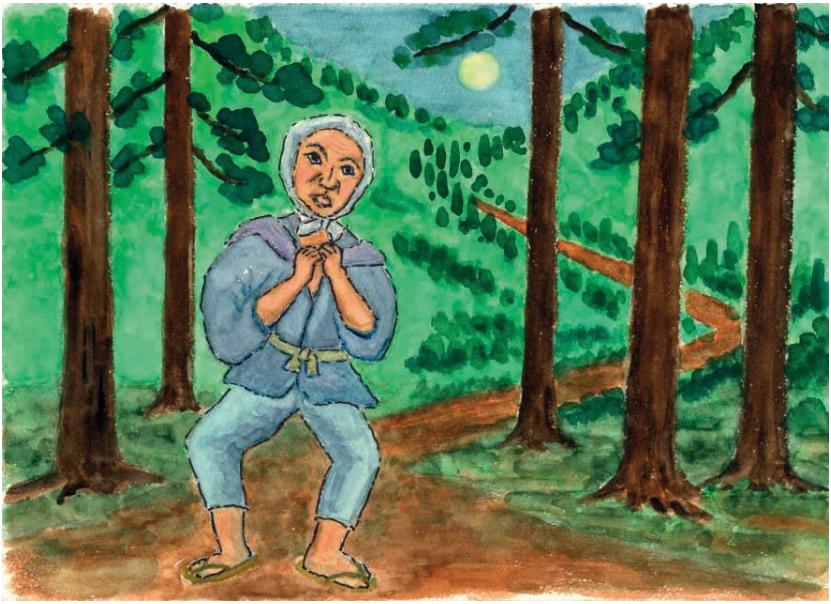
当時、寺井の町は街道筋にあり、宿屋が立ち並び、多くの旅人でにぎわっていた。

その日は月の明るい晩であった。百姓は町の中をあちこち歩きながら、金のありそうな大きな家をさがし回っていた。と、大きな門のある家が目についた。

「しめしめ、このうちはお金がありそうだ。」そう思うと、たちまち庭にしのびこみ、家の人の寝静まるのを　じっと待っていた。そして真夜中過ぎ、（もういいだろう、どうも寝静まったようだ）

そこは慣(な)れたものである。鋭(するど)い感でたちまちのうちに大金を盗み出し、一目(いちもく)さんにその家から逃げてしまった。





寺井から粟生の村へと向かい、三道山の村はずれに出ると、そこは寺井の下屋敷（したやしき）に通ずる分かれ道になっていた。

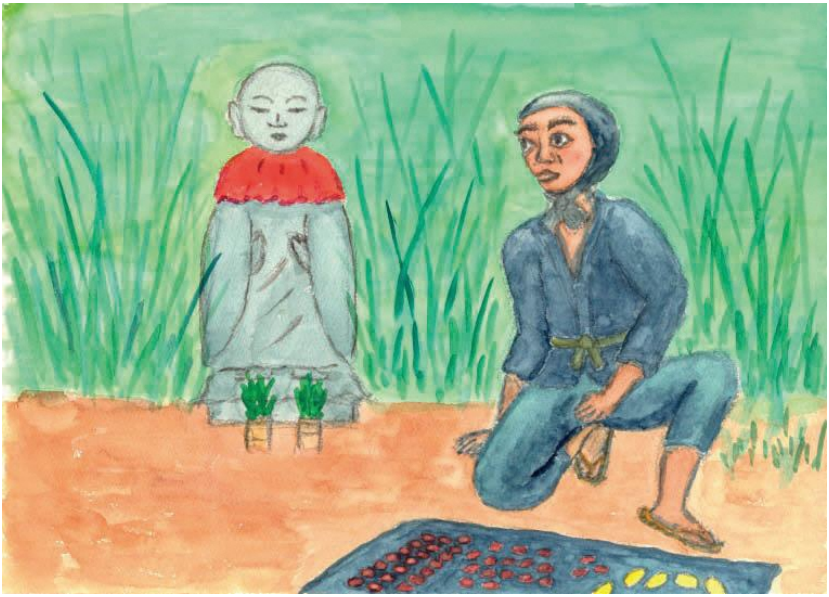
「やれやれ、これでもう大丈夫だ。しめしめ・・」と、独（ひと）り言を言いながら回りを見渡すと、暗いやみの中に、うすぼんやりと和田山、寺井山、末寺山が見え、あたりには家が一軒もないさびしいところだった。

ぬすっ人は、誰も追いかけて来ないのを確かめると、

「これでひと安心だ。どれどれ、風呂敷を広げてみるか。おおーこりゃぁ、重いぞ。」と、一ぷくしながら、盗んできたお金を月の光で数えてみた。

「うわっ、こりゃ大金だ、百両もあるぞ。こんだけありゃ、好きな酒が、思うぞんぶんに飲めるぞ。わしに運が向いてきた。運が向いてきた。」と、思わず、にたっと笑った。

そして、ひょいと、横を向くと、そこに、子どもぐらいの背たけのある地ぞうが立っておった。



地ぞう様を見たとたん、ぬすっ人は、どきっとした。（金を数えるのを見ていたのは月ばかりだと思っていたが、ひょっとすると、この地ぞうさまも見ておられたので
は・・・・）

そこでぬすっ人は思わず、地ぞうさまに言った。

「わしがぬすんだ金を数えていたことは、だれにも言ってくれるな。」

そうしたら、地ぞうさまは、はっきりと言われた。

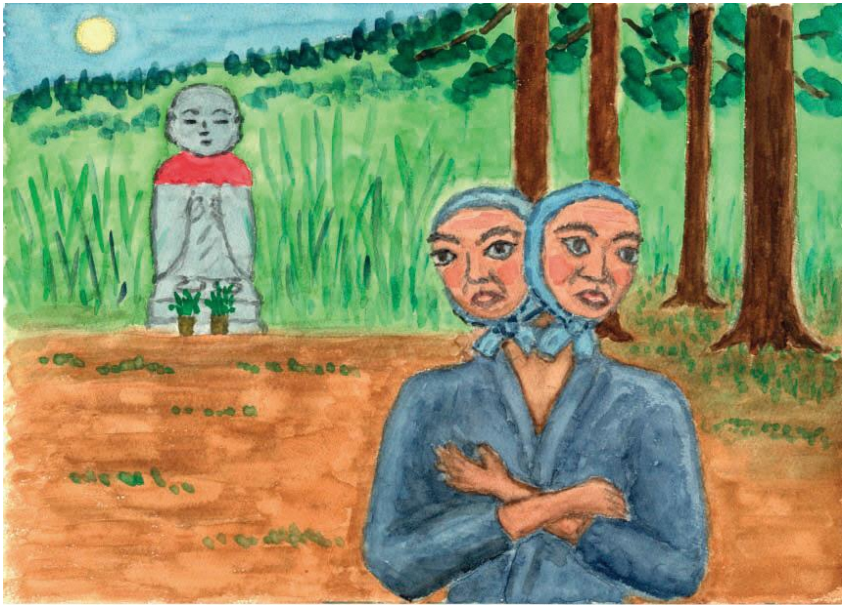
「わしゃ言わんが、わりゃ、きっと言うぞ。」

この言葉を聞いて、ぬすっ人はびっくり仰天（ぎょうてん）。

思わずあたりを見渡したが、だれもいない。

（間をおく）

「ふしぎなこっちゃ、やっぱり地ぞうさんしかおらんがな・・・」



ぬすっ人は急に気味が悪くなった。

（ひょっとすると、うわさ話に聞いた三道山の古ぎつねかもしれんなあ。うっかり油断していると、古ぎつねにだまされて、せっかく盗んだ金を取られてしまうかも・・・）

そう思うと、すぐさま風呂敷に金をつつみ、飛ぶように家に帰った。

もう明け方近くであった。

『ぬすっ人の昼寝』と言うが、家に帰ると気が楽になったのか、その日は晩方(ばんがた)までぐっすりと眠った。そして、夜になると盗んだ金を少し持ち、居酒屋(いざかや)に行って、大好きな酒をたらふく飲んだ。

それからというものは、毎晩、必ず居酒屋に通った。月日のたつのは早いもので、そのうち、あっという間に金を盗んだ日から一年目となった。

その晩も、いつものように居酒屋に行き、飲み友だちと酒を飲みかわしながら、あれやこれやと世間話に花を咲かせていた。

そのうち、だれかれとなく、酔いがまわってきたのか、声も一段と大きくなってきた。

と、突然　だれかが、

「おいおい、地ぞう様が『ものを言わっしゃる』と言うことを聞いたが、本当か?」

「ほんとうかい、そんなばかなことがあってたまるかい。」

「そうだ、そうだ。そんなばかなことがあってたまるかい。」

黙って聞いていたぬすっ人は、一年前のことを思い出した。そして、酒の酔いも手伝って、

「いやぁ、地ぞう様は確かにものをいわっしゃる。このおれがちゃんと聞いたことがあるぞ。」

なんとばかげたことを言う男だと、だれもあほらしくて相手にしなかった。

そうしたら、ぬすっ人は大声で、
「おまえら、ほんとうにせんがなら、言うてやるがなあ。実はなあ、去年のちょうど今日の晩のこっちゃ。わしゃ、寺井のある金持ちのうちから金をたんまりと盗んできたがや。そしてなあ、地ぞうさんの前で、その金を数えとったんや。」
「なんじゃと、おまえはぬすっ人したんか・・・」
びっくりしているまわりの人にはかまいなくも、
「そん時、どうもおれは地ぞうさまに見られとる気がしたもんやから、おれは、地ぞう様に、こう言うたんや。
『おれのしたこと、だれにも言うてくれるな』そう言うとな、地ぞうさんは、『わしゃ、言わんが、わりゃ、きっと言うぞ』と、言わっしゃったんや。
酔いつぶれ、自分がわからなくなってしもうたぬすっ人は、とうとうみんなの前で、一年前に自分がしたことを全部言うてしもうた。

さあ、その話が、たちまち村中の評判になり、とうとう役人の耳にはいってしもうた。

そして、ぬすっ人は役人にとらえられ、きびしく調べられた上、重いばつをうけることになったと言う。

そん時の地ぞう様は、今は昔の道から移されたが、現在、三道山から末寺（まつじ）に抜ける道に置かれている。

地ぞうさんの横に『地持（じも）ち地ぞう』とほった小さな石の柱があり、今もお参りする人があると言う。

この地ぞう様をお参りすると、歯のいたい人はなおると言うそうな。

絵・斉田　敏郎

こんにちは。

高坂町に伝わる民話「高坂ぎつね」のお話をします。

高坂町ではきつねやたぬきに関するお話がたくさん残っています。

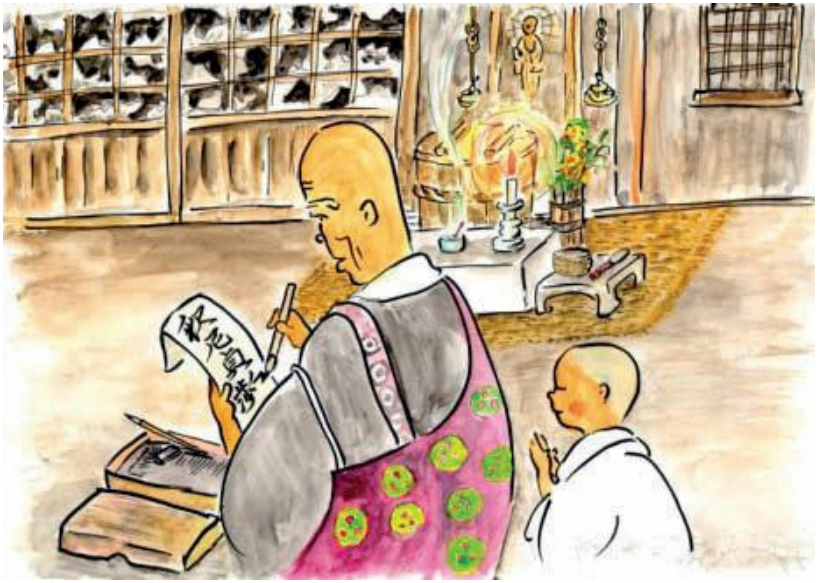
今でも高坂町・根上町公民館前には「高坂ぎつね」の石碑があり、小松市松任町には紙芝居に出てきます西照寺（さいしょうじ）のお寺があります。

それでは高坂町に伝わる民話「おたのしみに」

「はじまりー、はじまりー」

むかし、むかし、加賀の国、高坂村というところに、『高坂ぎつね』と呼ばれる、とてもかしこいきつねがすんでいた。

ある日のこと、この村のまずしいお百姓さんのおばあさんがなくなり、おそうしきには西照寺のご住職さんが、こ坊主をともなって行かれた。



村につくと、さっそく　なくなられたおばあさんのまくらもとにすわり

「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏・・・・」

と唱えながら、ご住職さんは筆と紙を取り出して、なにやらかんがえこんでおられた。

そして、ばあさんに呼びかけるように

「ばあさんや、おまえさんの法名じゃ。」

と、満足げに法名を仏前におそなえすると、お経を読み出した。

「帰命無量壽如来、南無不可思議光

法蔵菩薩因位時・・・・・」

こうしてお葬式を終え、ばあさんに最後の別れを告げ、お寺へもどった。

それから　二、三日経ったある晩のことでした。
時刻は「草木もねむる丑三つ時」
小坊主が部屋でぐっすりと眠っていると
「わん　わーん」
と、遠くで犬の声がひびきわたった。
と
「ご住職さま〜、ご住職さまー・・・・」
どこからかご住職を呼ぶ女の声が聞えた。
「こんな真夜中に、いったいだれじゃ」
こ坊主は目をこすりながら起き上がった。
そのとたん
「うわーっ」
と　思わず　大声をだした。

な〜んと月明かりに照らし出されて障子に女の影が写っているではないか。

障子に写ったその影は、頭を下げなんとも恨めしそうな姿じゃつた。

「だ、だ、だれじゃ」

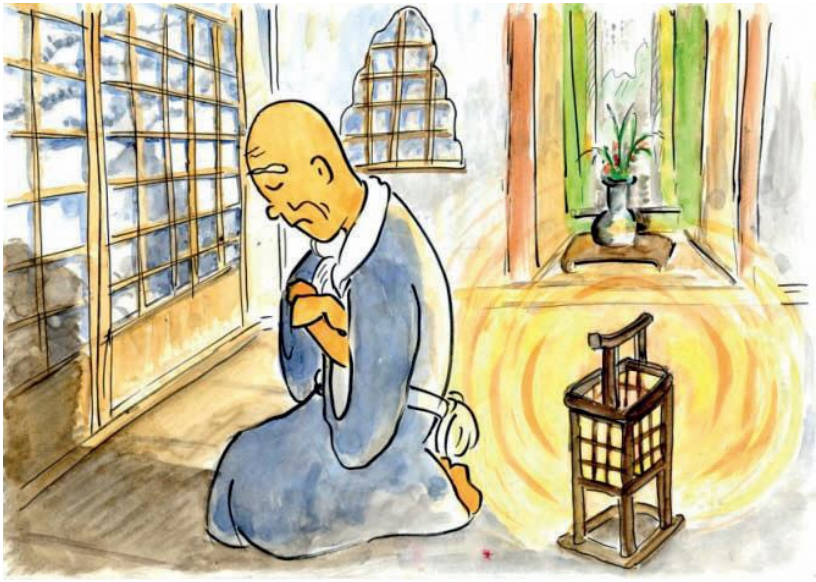
「お、おばけじゃー、おばけじゃー」

と、腰を落とさんばかりにびっくりした。

しかし、ようく見ると、お化けは手に紙のようなものを持って、それをちらちらさせながら、やみの中に消えていったのである。

こんなことが三日三晩も続いたので、さすがに小坊主はおそろしくなり、そのことをご住職に話した。

小坊主のはなしを聞いた住職さんは
「よし、わしがお化けの正体をつきとめてやる。」
と、その夜、障子をみはることにした。
だんだん夜もふけ、遠くで
「クァー、クァー」とカラスの声が
住職さんは、今か今かと目を見開いて待っていたが、お化けはなかなか障子に現われなかった。
そのうち「ザー、ザー」と、風の音が聞こえ、その心地よい音にご住職は、いつしか、うつらうつらとねむりかけていた。
その時である。
「もぉーし、もぉーし」というばあさんの声が聞え、目の前の障子に、いきなりお化けの姿が映し出された。



びっくりした住職さんは

「こりゃー、おまえさんはだれじゃ」

「わたくしは五日前にご住職に法名をいただいたもんです。」

「おー、おー、あん時のばあさんかい、おまえさんにしちゃ、てんぽにりっぱなとむらいじゃったのう。」

心の中では

（今日こそ、化けの皮をはがいてくれん）

と、思いながら声をかけた。

すると、住職さんの心をみぬいたのか、お化けは逃げようとしたが

「これ！、逃げるんじゃない。にげるんじゃない。」

「さあー、来い。今日こそ正体をあばいてやる。」

住職は逃げようとするお化けの腕をつかみ、
部屋へ引きずりこんだ。
「うーぅ、う、うーぅ。」
「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀ー。」
「南無阿弥陀仏ー・・・・・・・・」
「う、うーっ、あー、あー、うわーっ」
「南無阿弥陀仏、南無ー・・・・・」

住職はお経を唱えながら、お化けのほおかむりをむりやりはぎとると、な-んときつねがあらわれた。

「やい、この化けぎつねめ、なにあって　この住職さんをだましたんだ・・」

小坊主がきつねをにらみつけて、思わずさけんだ。

「ご、ご、ご住職さん、ち、ち、ちがうんです。ちがうんです。この法名をよーうく見てください」

「ご、ご住職さんは法名を書くとき、文字を一字まちがえたんです。」

「なにぃ、そんなことがあるもんか」

「もう一度よーうく見てくだされ」

住職さんは思わず法名をじっと見つめると

「なーるほど、たしかに一字まちがえておる。これはわしの失敗じゃ」

それを聞いて、きつねが話すには

「先日の葬式の夜のことです。わたしがいつものように、すすきのはえている高坂の原っぱを走っているときのことです。なんやら泣き声がするので、ようく見ると、極楽へ行ったはずのばあちゃんが道に迷って泣いていたのです。」

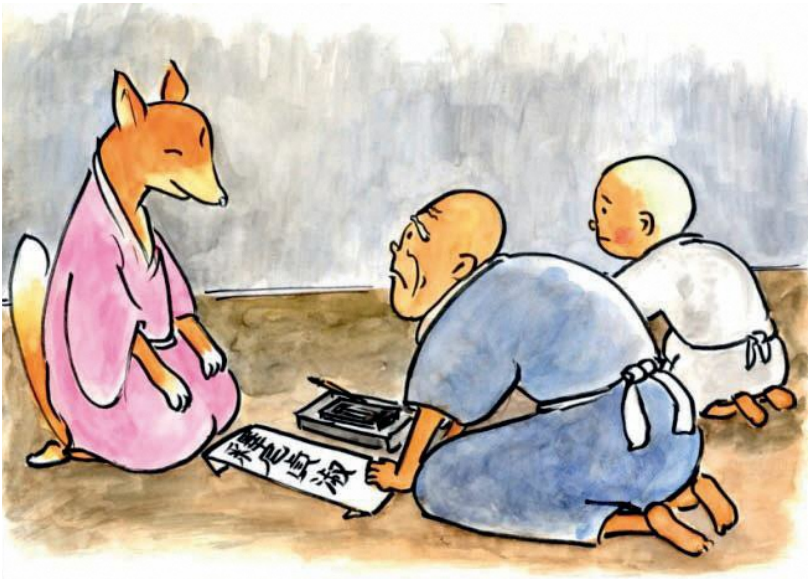
そこで、訳を聞いてみると

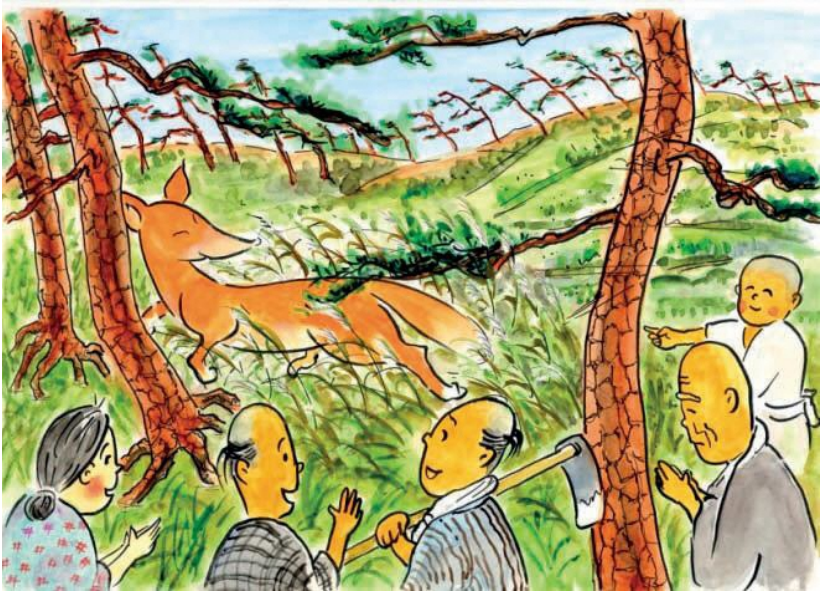
「わしゃ、極楽とやらへ行って法名を見せると、門番は『ばあさんや、門の中に入れるわけにはいかん』と、追い返された。」

ということなんです。

「そんで、ばあさんは、どうしたらよいもんかと迷って、泣いていたんです。」

「そんなら、ちょっと法名をわしに見せてくれんか。」
住職さんは法名をもらうと、
「なるほど、法名の文字が一字違っとる。ばあさんは、字が読めんから、間違いには気がつかなかったんじゃ。」
そして、きつねに向かって
「そんで、お前がばあさんの代わりに、わしのところへきたという訳か」
「そうなんです。」
「すまん、すまん。そうとは知らずにとんだ失礼なことをした。許してくれ」
住職さんは深々と頭を下げて、狐にあやまりました。





こうして、ばあさんはご住職さんに新しく法名を書き直してもらい、無事に極楽にいくことができたということです。

（それにしても、法名の文字を間違えるとは。わしとしたことが、なんと言う不覚・・・）

と、ご住職は深く反省されたという。

「きつねとはいえ、法名の間違いを見つけることができるとは、なんと立派なきつねじゃ。高坂のきつねは、あの世からのおつかいじゃ。」と。

こうして、高坂ぎつねの話は、今も在所の人に語り伝えられてきている。

絵・後　泰夫

むかし、あったといね。
じいとばあがあったといね。
じいは雀（すずめ）を飼うておったと。
ある時、じいは山へ柴かりに行ったがやと。
ばあは洗たくしょうと思うて、のりを煮たんやと。
ほうして、川で洗たくしとるあいだ、のりは桶（おけ）に入れて、縁（えん）にだしておいたんやと。
雀はおなかがすいたさけ、のりをぺたぺたァとみんななめてしもうたとい。
そこへばあが川からもどってきて、

「おんどりゃア。のりをみゃんな、なめてしもうたてか。そんなやつァ、こうしてやる」と言うて、雀の舌を切って、羽を切って、尾を切って、ほうしてたたき出したがやと。

ほうしたら、じいが、

「ばあ、今かえったとォ」と、言うてきたと。

ほして、雀はどうした、と聞くから、

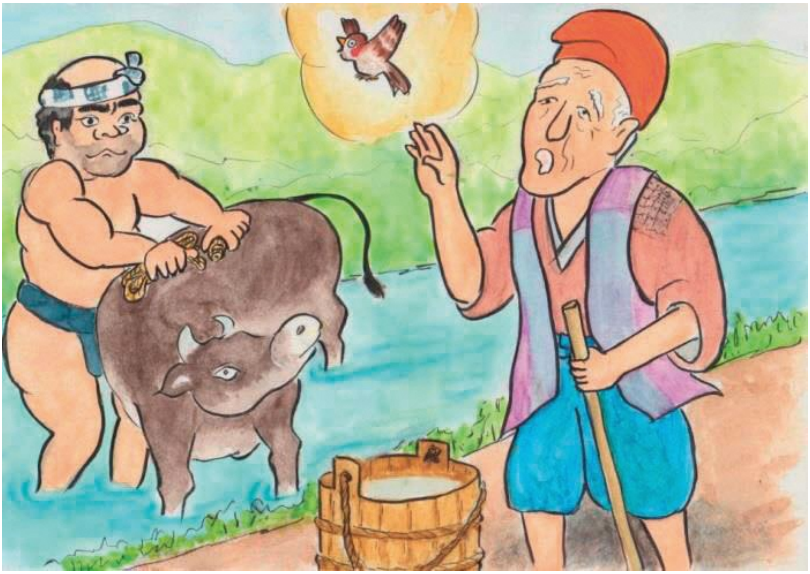
「雀はのりをなめてもうたさけ、舌を切って、羽を切って、尾をきって、たたき出してやった」というたと。

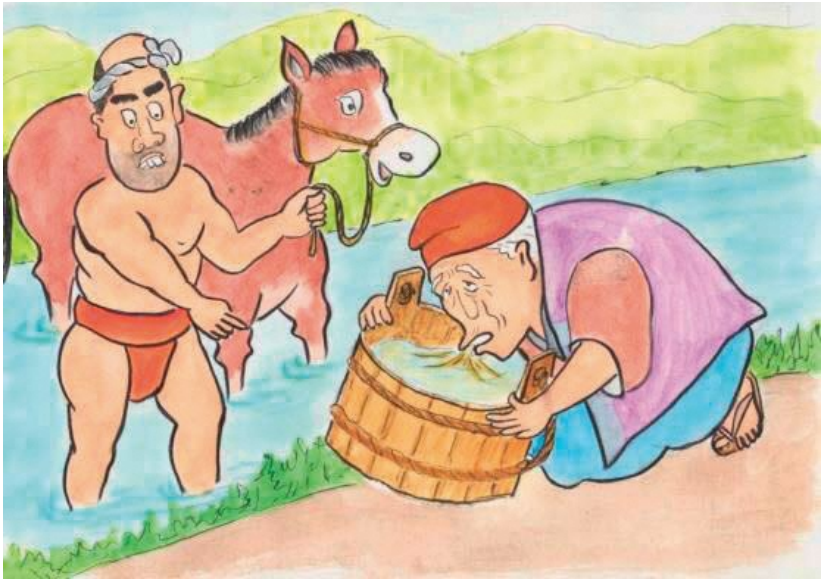
ほうしたら、じいは、

「かわいそうなことをしたなあ。舌を切って、羽をきって、尾を切って。なんとかわいそうになあ」

と言うて、雀をさがしに行ったがやと。

「舌きりすゥずめ、どっちいったァ、
羽切りすゥずめ、どっちいったァ、
尾ォ切りすゥずめ、どっちいったァ」
というて行ったと。
ほうして、川の端まできたら、川で牛を洗うとる男がおったといね。
「牛洗いさま、牛洗いさま、ここを雀が通らんだかいや」と聞くと、
「ああ、通った、通った」というたと。
じいが「どっち行ったか、教えてもらえんかの」と聞くと、牛洗いの男は、
「そんなら、この牛洗い汁、桶一杯飲んだら教えてやるわいの」というたとい。
じいは牛の洗い汁を桶一杯、ちゅちゅちゅちゅちゅうて、飲んだといや。
ほうしると、
「この先に馬洗いがおるさけに、そこで聞くがええ」と教えてくれたがやと。





じいは、「舌きりすゥずめ、どっちいったァ、羽切りすゥずめ、どっちいったァ、尾ォ切りすゥずめ、どっちいったァ」と呼んで歩いておると、川の端で馬を洗うとる男がおったがいやと。

「馬洗いさま、馬洗いさま。ここを雀が通らなんだかいや」ときくと、

「通った、通った」ちゅうたと。

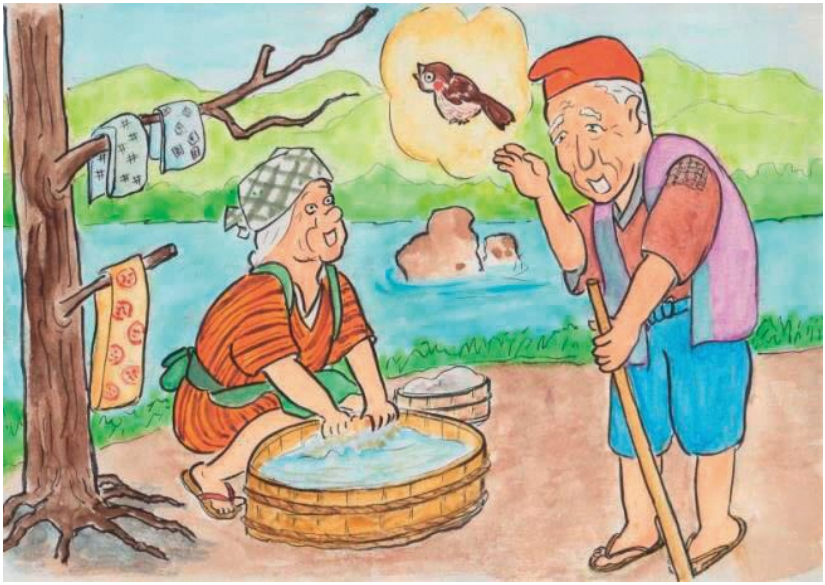
じいが、「どっち行ったか教えてくれんかいの」というと、馬洗いの男は、

「この馬のあらい汁、桶一杯飲んだら教えてやろうわいの」と言うたがやと。

そこでじいは、ちゅちゅちゅちゅちゅちゅうて、馬の洗い汁を桶一杯飲んだがやと。

ほうしたら、「この先に、洗たくしておるばあがおるさけに、そこで聞くがええ」と教えてくれたがやと。

そこでじいは、
「舌きりすゥずめ、どっちいったァ、
羽切りすゥずめ、どっちいったァ、
尾ォ切りすゥずめ、どっちいったァ」
と言うて行くと、川の端で、ややこのおしめを洗うとるばあがおったがいやと。
じいは「おばば、おばば。ここを雀が通らなんだかいの」ときくと、洗たくをしておるばあは、「通った、通った」というたと。
じいが、「どっち行ったか、教えてもらえんかいの」
というと、「そんなら、このおしめの洗い汁、たらい一杯飲んだら教えてやるわい」と、いうたと。
じいは、おしめの洗い汁を、ちゅちゅちゅちゅう、て、飲んだがやと。ほうしたら、「この川の上に竹やぶがあるがや、そこが雀のお宿じゃ」
と教えてくれたといや。そこでじいが、



「舌きりすゥずめ、どっちいったァ、
羽切りすゥずめ、どっちいったァ、
尾ォ切りすゥずめ、どっちいったァ」
と呼んでいくと、竹やぶがあって、そこらで雀が
ちゅんちゅんちゅんと鳴いておったがやと。
じいが、「舌切り雀はおるかいの、羽切り雀は
おるかいの、尾ォ切り雀はおるかいの」という
と、
雀が出てきて
「おめえさま、ようきて、くとんしたなァー」
と、じいを迎えたと。

ほうして、

「じいさま、じいさま、ままのよういするがやが、ぬりのごぜんがええか、木のごぜんがええか」というたと。

じいは、「木のごぜんでけっこう、けっこう」というたと。

雀はまた、「じいさま、じいさま、金（かね）の箸にしようか、木の箸にしようか」というたと。

じいは、「木の箸でけっこう、けっこう」と言うたと。

雀は、木のおぜんに、ごっつォをたんとのせて、木の箸をそえて、「くうてくとんし」と、ままをだしたんやと。

じいがままをくてしまうと、雀は、今度は、雀踊りを見せてくれたがやと。それはそれはめずらしいもんであったといね。

ほうして雀は、

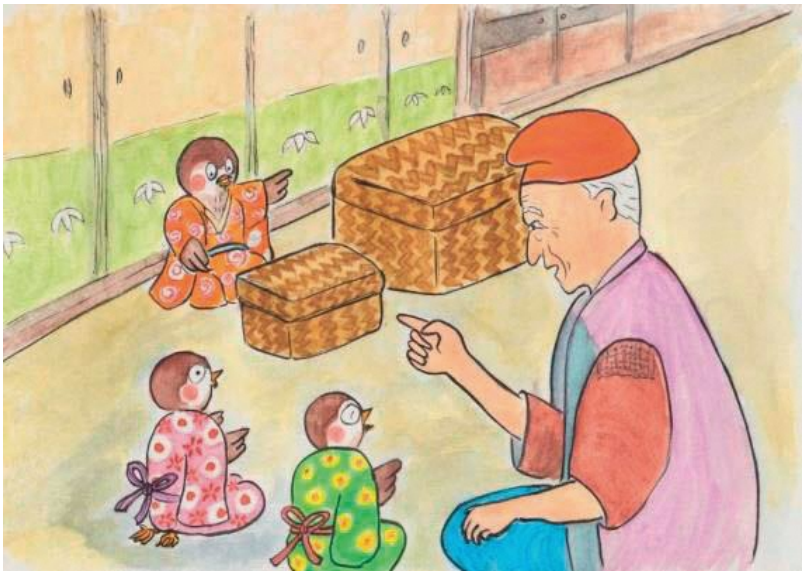
「おめさま、今夜はとまってくとんし」というたと。

じいが、

「そんなら、とめてもらおうかいの」というと、

雀は喜んで、また歌や踊りをみせてくれたがやと。

さて、あくる朝の、ままがすむと、じいは、
「ほんにゆっくりさせてもろうたし、たんとごっつぉになったし、そろそろもどることにしようかいの」というたと。
ほうしると雀は、
「じいさま、じいさま、みやげをやるがやが、でけェつづらがええか、ちっちェつづらがええか」ときいたと。
じいは、「うらは年よりやさけぇ、ちっちェつづらでええわいな」というたと。
ほうして、ちっちェつづらをもろうて、
「あんやとう」というと、雀は、
「またきてくとんし」と道まで送ってくれたんやと。
じいがうちへ帰ってつづらを開けたら、



大判やら、小判やらがいっぺエ入っていたがやと。
それを見たばあは、
「なんでェ、でけェつづらをもろてこんだがや」
というたと。
ほうして、
「うらも行ってくるかの」というて、

「舌きりすゥずめ、どっちいったァ、
羽切りすゥずめ、どっちいったァ、
尾ォ切りすゥずめ、どっちいったァ」
と、呼ばって行ったといね。
ほしたら、川の端で牛を洗うとる男がおった
と。
「ここんとこを雀が通らなんだかいの」
と、ばあが言うと、牛洗いの男は、
「この牛の洗い汁、桶一杯飲んだら教えてやる
わいの」というたと、ばあは
「なんで、そんなもん、飲めるかいな」
というて、桶をひっくり返して、どんどん先へい
ったと。

ほうしたら馬を洗う男がいたと。
「ここんとこを、雀が通らなんだかいの」
とばあがいうと、馬洗いの男は、
「この馬洗い汁、桶一杯飲んだら教えてやるわいの」
というたと。ばあは、
「そんなもん、飲めるかいな」というて、
桶をひっくり返して先へ行ったと。

ほうして、おしめを洗うとるばあに会うたと。

「ここを雀が通らなんだかいの」と、ばあが聞くと、

「このおしめの洗い汁、たらい一杯飲んだら教えてやるわいの」というたと。

ばあは、「そんなもん、飲めるかいな」というと、

たらいをひっくり返して、どんど、どんどと先へ行ったと。ほうしたら、

竹やぶの中でちゅんちゅんちゅんと、雀の声がしたんやと。ばあが、「うら、きたどお」と呼ぶと、雀が出てきて、

「おや、ばばさもきたがかいな。まず、上がってくとんしエ」というたと。ばあは、

「まま、出さんがけエ」というたと。雀は、

「そんならぬりのごぜんがええか、木のごぜんがええか」というたと。ばあは、

「ぬりのごぜんでのうて、どうなるッ」というたと。ほしたら雀が、

「金（かね）の箸（はし）がええか、木の箸がええか」というた。ばあは

「金（かね）の箸でのうて、どうなるッ」というたんやと。雀はぬりのおぜんにままとつけもんだけのせて、金（かね）の箸をそえて、

「くってくとんしェ」と出したと。ばあは、ままをかっこむと、

「みやげはないのけ」というたと。雀が、
「でけェつづらがええか、ちっちェつづらがええか」というと、ばあは、
「うらはまだわけェさけ、でけェつづらがええがな」というて、でけエつづらをかつがせてもろうたがやと。

ばあは、でけェつづらを、うんこら、うんこらかついで歩いたがやが、重とうて重とうて、道端でつづらを降ろして休んだといね。

ほうしたら、中が見とうて、見とうて、どもならん。ばあは、ふたを開けて見たといや。

ほうしると、中から、わらわらわらっと、おとろしもんが、たんと出てきたんやと。

へびだの、まむしだの、ろくろ首だの、おとろしもんばっかり、たんと出てきて、ばあは目をまわして、ぶったおれてしもうたといね。

絵・後　泰夫

（大口町に伝わる「したきりすずめ」）